

「今、私の晴雨計は！」⑦

「地方創生という国の政策」

平山 征夫

早いものでもう師走だ。だがこの冬はいつになく温かく、今のところ新潟市では曇すら降っていない。先日訪れた豪雪地帯の魚沼市でもさすがに八海山は白くなってきたけれど里には全く雪がない。過去には「年明けまで降らなかったこともあった」と聞かされて、降ってもらわないと困る事情のある私としては少々焦りを感じながら帰ってきた。それは来年二月に知的障害者のスポーツ大会である「スペシャルオリンピクス冬季大会」を新潟で開催するが、その実

行委員長を務めていて、ふわふわの雪の上で思い切り走らせてあげたいと今から願っているからだ。

師走と言えばこの一年を振り返れば、我が家にとっては良い年だった。皆が健康だったうえ待望の初孫が誕生したからだ。孫が出来ての一番の印象はわが奥様の張り切りようだ。娘以上に孫の面倒を見ている。疲れないかと愛妻家の私は心配なのだが、私の面倒を見るのとは全く違うようだ。それに孫をあやす時の声は限りなく優しい。大昔、新婚時当初にちよっと聴いたような気がする声だと思いながらにこにこ眺めている。ところで魚沼市には、政府の「まち・ひと・しごと創生事業」、いわゆる「地方創生」に応じて同市

民会議で作成した総合計画など議論するシンポジウムの基調講演を頼まれて訪れたのだが、その数日前にも全国知事会の「制度調査会」の一員として金沢、宇奈月方面を地方創生の先駆的事例の視察で訪れた。金沢の高齢者・若者等の混住施設には安倍総理も日本版CCRCのモデルということで視察している。けれど、訪れたその金沢は北陸新幹線の開通効果で観光客でごった返していた。二十一世紀美術館は本年入場者が美術館としては異例の220万人を超えそうという。こうなるとこの街に

「地方創生」事業は必要なのかと思いつながら展示室の人込みの中を歩いた。今や国中あげて「地方創生」で

あるが、先般先駆的事例部門の交付金配分が決まった。途端に落選した過半の自治体から「この事業は実質終わり。国の重点は一億総活躍政策に移ってもいるし・・・」という声が聞こえてきた。知事として私のやったことで唯一(?)の評価を得ている「大地の芸術祭」は、構想までに四年半を費やしたことを思うと、「国が市町村に半年もかけずに案を出させて、交付金の取り合いをさせるような政策でうまくゆかないだろう」という私の懸念はどうも当たったようだ。市町村は「地方創生」という事業を国から取り返し、自らの政策として再トライすべきだろう。

(平成二十七年十二月十四日)